

表象空間としての都市—パリのクライスト

宇和川 耕 一

1810年ベルリンの気球

1810年10月、クライストは、同月自ら編集・発行を始めた『ベルリント刊新聞』に、「ベルリン便り」と題して、ドイツ気球飛行の父、F. W. クラウディウスの飛行を予告する記事を載せている。本文の執筆は午前10時と記され、12時には風が非常に強かった、2時にはまだ気球の装填が終わっていない、4時前の上昇はないだろうという噂だ、との追記が2時に書かれている(II 388 f.)¹⁾夕刊の発行が5時だったというから(II 942)、今なら同時中継にあたる速報形式のルポである。

結局この飛行は行われず、翌日、号外として「昨日のクラウディウス氏の飛行について」が出る。前日のルポの骨子には、クラウディウスの飛行が機械による操舵であるのに対し、風の流れを利用して舵を取る方法が発見されているという主張が潜んでいるし、「号外」でも、予定通りパリから Reims 経由でトリーアに飛んだ Garnerin の、いわば自然操舵法がクラウディウスの試みに対置されている。この論調に対し、専門家の見解として、自然操舵法の如きものは発見されていない、それは似非科学的言辞で人心を惑わすものだ等の指摘が他紙に載せられ、それに対しクライストはさらに「飛行術」という文章でかなり奇妙な理論を繰り広げて反論している(II 391ff.)。

この論争には、『操り人形芝居について』でクライストが展開しているよう

な、「(有機的)自然」対「技術(機械)」という対立項の設定と、自然に身を委ねることによるその克服、という構図が見られないわけでもない。また、クライストの飛行術の技術的論証は科学的でなく、しかも追求されるとあっさりと引っ込めているところから、気球飛行は政治的メタファーであるという見方もある。親ナポレオン政策をとるプロイセンの検閲の元での、ドイツ的アイデンティティーの模索が、ベルリンの〈風〉に確かに影響していたであろう。啓蒙対ロマン主義、フランス対ドイツという布置の中で「ベルリン上空にはまさに様々な風が吹き争っていたのである。」そんな状況で、「肝心なのは、経済政策などの物質的な調整に〈機械的〉に合わせるといったこと、数学的に計算できるようなことではなく、外国の支配からの解放に情熱的に関わることであった。」²⁾

Hibberd も言うように、メタファ的手法に隠された意図があるとしても、クライストがその試みに成功したとは言えないように思う。だが、ここではむしろ、クライストが似非科学的知見を利用して(Hibberd のいうところの〈科学パロディ〉)ルポを書いていること自体に注目したい。『夕刊新聞』の発刊を動機づけているものは、(隠された)政治的、自然哲学的等々の意図である以上に、編集者的、ジャーナリストの意図であるからだ。都市ベルリンの多数の読者の興味をそそるものを、即時的に提供することが『夕刊新聞』の狙いである。この時代、科学的知見はその「新しさ」において、まさに似非であるがゆえに人気を博していた。わけでも、興味を惹くという点で気球飛行はまさに恰好の話題であった³⁾ 重要なことは、このことが、18世紀後半の交通の発達、人と物の流れの活発化を背景として、新聞メディアを介しての通俗化された情報の循環の中で、漸増的に起こり始めていたということである。

1801年パリの気球

9年遡る1801年7月、パリを訪れたクライストは、7月14日のバスティーユ牢獄解放記念の自由と平和記念祭について次のように書き送っている。「こ

のような祝日をどのように祝うのがふさわしいのか、確かには分かりませんが、今日のほど台無しなやり方はまずないだろうというのは分かります。オペリスク、凱旋門、飾り付け、イルミネーション、花火や気球、祝砲といったものが物足りないというようなことではありません。しかし、どの催しにも、本来の考えを思わせるものはなく、民衆の精神を、吐き気がするほど娯楽を集めて散らそうという意図が、至るところに見え見えでした」。(7月18日付けカロリーネ・フォン・シュリーベン宛書簡。B 240)⁴⁾ これについては、ルイーゼ・フォン・ツェンゲに充てた8月16日の手紙でも触れている。「7月14日の平和祭の夜上げられた気球には鉄の輪が付いていて、花火が取り付けられていました。それが空中で燃え、気球にも燃え移るという仕掛けでした。美しい見世物でしたが、気球が燃え上がれば、鉄の輪が人々のひしめく野原に落ちることは予見できることでした。しかし、人間一人の命はここでは80万の取り替えのきく物であって—気球は上がり、鉄輪は落ち、それに当たって何人かが死んだというだけのことでした。」(B 265)

少し前、婚約者ヴィルヘルミーネ宛の6月28日のシュトラースブルクからの書簡には、スイスを回って行く予定をこの祭典の噂を聞いてわざわざ直接パリに行くことにした、パリで長い手紙を書くことあり、加えて、次のように書いている。「やっと少し落ち着けるのが嬉しい半面、訪れる町に対して心が抗っているような気がする—フランス人についてはまだ恐ろしさと悪徳の話しか聞いたことがないので—」。(B 234) その後のパリからの書簡はその類の話に事欠かないことになる。

先のカロリーネ・フォン・シュリーベン宛の書簡は、数ヶ月前のドレスデンの思い出話で始まるが、「遠い異国の地から友人の精神はあなたのもとへ飛んで帰り、ドレスデンの愛らしく優しい谷に降りていきます。そこは高慢で、放肆で、恐ろしいパリよりも精神の故郷なのです。」という文面は、世話に対する謝礼のみを意味していない。ドレスデンと対比されるパリの町と人の冷たさ、生気のなさ、小利口さ、気取りが緩られ、それと対比して再度ドイツが描写される。ドレスデン、ハルツと続き、最後にライン川の風景が「ドイツの最

も美しい地方」として描かれる。記念祭の報告が来るのはその後である。

パリの「悪徳」ぶりについては、その後の何通かの書簡で更に詳細に、具体的に述べられていく。「時折私が町を歩いて行くとき目に入って来るのは一おかしなものが色々、嫌なものはもっとたくさんで、時々面白いものがあるだけです。ゆがんだ長い通りは汚物と埃に被われ、悪臭に満ち満ちています[...]」。ルーヴルを訪れた帰路—「パレ・ロワイヤルを歩いて行くと、パリの恐ろしさといわゆる喜びの全てが分かります。あらゆる感覚の欲望は、ここでは吐き気がするまでに満たされ、ここではあらゆる徳が傲慢に嘲弄され、卑劣の極みが堂々といわれるのです[...]」。(アドルフィーネ・フォン・ヴェルデク宛，7月29日。B 255) 8月16日のルイーゼ・フォン・ツェンゲ宛の上述書簡は更に辛辣である—「裏切り，殺人，盗みはここでは日常茶飯事で，誰も驚きもしません。父が娘と，息子が母と姦通するのも，友人たちや親戚の間で殺し合うのも，いくらもあることで，隣の人間も一顧だにしません。」(B 264) クライストはこの他にも珍しい見聞を披露している。道化，覗きからくりなどの見世物，盲人のコンサートのあるカフェ，食事，人工の氷（アイスクリーム？）等々。要するに，「フランス人はとめどない娯楽癖に追い立てられてうろつき回っているのです。」(B 267)「フランス人は，目を眩ませられるほど好きなことはないからです。」(B 268)

言説としてのパリ

先の平和祭についてクライストは，「ルソーはフランス人の四言目には出てくる名前ですが，これが彼の業績だと言われたらどれだけ恥じることでしょう。」と書いている。ひたすら華美と気晴らしを追求する祭典のあり方に，ルソーの名において批判が向けられるが，凡そクライストがパリ書簡の中で展開している文明批判と自然讃美のあらかたが，大きな意味でルソーの文脈にあることができる。その文脈の中で18世紀後半を形成してきた自然観や合理主義批判が，あるいはまたそれに則った暮らしぶりが，忠実な啓蒙の学徒で

あろうとした自身の内部崩壊を契機に、クライストの意識に浮上してくる。(後の反ナポレオンというもう一つの契機も、それを強化するものではあっても、別種のものではない。)

しかし、注意しておかねばならないのは、クライストが必ずしも、ルソー流の自然観・文明観を内在化させたうえで、自身の言葉としてそれを語っているのではないという点である。彼が何らかの否定的な予見をもってパリを訪れたことは、先のシュトラースブルクからの書簡にすでに見える通りである。上記の文明論的観点からのクライストのパリ観察・批判については、手紙を読む相手への旅先からの話の種、そのための多少の誇張はあるとしても、果たしてこれらのことをクライストが本当に、あるいはどの程度、自身で体験したのか、当然ながら疑問は湧く。この点に関して、Siegfried Jüttnerは、「一般的なパリ・イメージのより広範な、より偏見のない総括」が必要だと言う⁵⁾。騒音、汚れ、悪臭などの交通に対する不平、慌ただしさ、金銭欲、貧困と贅沢…「要するに、この恐怖のイメージの中には何でもある。[...]そしてこのイメージが18世紀の文学、長編小説、雑誌、パンフレット、小冊子で広まっていく。」「恐怖のパリ像は18世紀を超えて続く文学的伝統をもつ。」(Jüttner 178)クライストが多かれ少なかれこの、「中世から続く」伝統の中でパリを見、描いていることは確かであろう⁶⁾。とは言え、当然の留保は必要で、彼のように批判的・否定的に見ている例は少ないものの、他の旅行者も記念祭で死者の出たこと、パレ・ロワイヤルのカフェの盲人オーケストラなどについて述べている。「クライストの判断や観察は同時代人の報告によって十分確認のとれるものも多く、単に“前もってもっていた意見であり紋切り型の表現”と片づけるわけにはいかない。」⁷⁾

フランスないしフランス語のクライストへの影響については多方面にわたって指摘されている。古くは1960年代に、クライストのフランス啓蒙思想受容と、フランス側からのクライスト受容について論じた Claude David によれば、「ハイネを除いて一まさにハインリヒ・フォン・クライスト程、生と営為の全体がこれほどフランスに関わっていると思われるドイツ詩人はほとんどいな

い」⁹⁾ ルソーと並んで、特に懐疑的なスタンスに関して、直接にあるいは間接に（18世紀ドイツでの受容を介して）モンテーニュの影響も指摘される⁹⁾ クライストの物語『チリの地震』の原典はモルマンテルの『インカ人 *Les Incas*』だともいう¹⁰⁾ そもそもクライストのフランス語力は相当なものだったようで、特に散文では、その影響は文体やリズムに留まらず、その統語論的レベルにも及ぶとされる。その影響は無自覚的なものであるとする見解に対して、Moering は次のように言っている。「クライストの詩的言語はシンタクス面でのフランス語から取り入れた特徴（内的 Gallizismen）に富んでおり、[...]私はこれを一定の目的一躍動感、明瞭性、緊張、テンポのための意識的な模倣と見なし、クライストの“劇的な”説話体として評価する。」（Moering 166）

後には政治的に反ナポレオンの姿勢を明確にするとはいえ、クライストのフランスに対する態度は全体として単純ではない。ただ、この時期の、そしてパリのクライストは特に、ルソーの目で見、ルソーの口調で語っている。ライン川の風景美を讚える姿勢然り、あるいはまた、都市批判にとどまらず、自然科学的学問研究を批判する姿勢然りである。すでに触れた「ドイツで最も美しい地域」マインツからコーブレンツにいたるライン河畔を描写するくだり—「それは詩人の夢のような土地で、どれほど豊かな想像力であろうと、開けるとみれば狭まり、花咲くとみればもの寂しく、笑うかとみれば恐ろしがらせる、この谷ほど美しいものを思いつけないでしょう。」（B 239）さらに別の書簡では一大気と川の流れの波が「完全なるシンフォニー」を奏で、小舟に乗って横たわって「優しく流れに運ばれるまま、地上のことをすっかり忘れ、空だけを眺めていた」かつての思い出が語られる（B 251）。非在の場所を憧れるこのロマン派的な心情は、この時期の彼に特徴的とも言えるが、パリにあって、ルソーを介して吐露されていると言えるだろう¹¹⁾

パリを含む、クライストのこの旅行の意図ははっきりしない。様々なものからの逃走が共通項として見える。窮屈なベルリンと公務からの、その原因となったと彼の言う「悲しい哲学」からの、親族の期待からの…。何に向けての逃走か。端的に言えばルソーへの逃走である。「自然科学の研究」を目的として挙

げるが (B 241), 言い訳に過ぎないことはすぐに分かる。「幾つかの講義に出た」後のクライストの自然科学批判は激烈である。「ああ、この人たちは酸だアルカリだの話をしている、私の方は渴望のあまり唇が乾いているのです」(B 256)。「[...]知識は我々を良くしてくれもしないし、幸福にしてもくれません。物事の連関の全部を見通せたら素晴らしい！ しかし学問の最初と最後は闇に包まれているのではありませんか？ それとも私はこの全ての能力、全ての力、全人生を、昆虫の種類を知るとか、植物をそれなりの場所に配置するとかのために、使うべきなのでしょうか？」「植物学者にとっては地球全体が大きな植物標本に他なりません。悲しげな白樺であれ、その陰に咲く堇であれ、彼にはリンネの分類名しか重要でないのです。」(B 257)

このもっともでもある批判の結果、ならば自然に帰ればいいのか、とクライストはルソーの問いかけを自問し、無知の迷妄と知識のもたらす欲望の開放の狭間で堂々巡りをする。因果が複雑に絡み合っている以上、絶対の悪も善もない、と。ここからの脱出は、「行為すること」であり「楽しむこと」だと彼は言い、学問を放棄してパリを去る。いずれにせよ、行為と享受を目指してクライストが、「畑を耕し、木を植え、子どもを作る」というペルシャの掟（これもモンテスキューの引用）を持ち出して向かう先は、「緑の小屋」を買うというスイス、やはりルソーであった。

これが婚約者に対する言い訳か否かはさておき、パリ書簡におけるクライストのルソー的文明批判に、クライストの真摯な苦悩と思索の表れを見ても、ちょうどその時点において本格的に始められたはずの彼の創作に、書簡に表れたような自然描写、自然観が出てくることはほとんどない。非常に多弁な書簡が、詩作のための習作の役割を果たしたとは言えようが、そもそも彼の作品には思想的な含意はほとんどないと言っているのである。（『操り人形芝居について』は文明批判として議論されることが多いが、これについても議論の分かれるところである。）後に作品に採用される自然に関する表現が、書簡の中に胚胎している例は散見される（例えば枯れた檜は嵐にも倒れないが、花の咲いた檜は倒れる、など）が、大部分の自然描写はまずは紋切り型であり、非常

に寓意的・擬人的である。そうでない個所もあるが、そこにある自然は総じて、「一つには寓意的な、前主観的な絵画の伝統、さらには、はっきりと対比をなして、ルソーによって発明された文学的心象風景」(Hülk 39)である。¹²⁾

クライストとノのメディア

書簡に文学作品のような独創性を求める必要はむろんなく、クライストの記述がその時代の(というより正確には少し前の)言説をなぞったものであったとしても、そのこと自体が彼の創造性を減ぜしめるものでもあるまい。また、ここで問題としたいのは、書簡を含めて、クライストのテキストをめぐる影響関係や間テキスト的連関ではむしろない。「精神的フランスはクライストにとって、常に18世紀の知的世界と同一のまま」であって、「本当のカントをあまり理解できなかったと同様、クライストは本当のルソーも恐らくあまり理解していない。」(David 12)という指摘は恐らく正しい。18世紀後半の思潮・言説の中で、それまでの定型的な自然表現は新たな自然の発見に伴う描写に取って代わられる。その変革に当たったのがリンネからビュフォンへとつながる博物学者であり、その平明な代弁者がほかならぬルソーだった。だが、パリ書簡でのクライストがリンネ的自然理解に合理的科学主義の否定的側面を見ていた如く、ルソーの(というよりルソーに由来する)無垢の自然と自然人という理想像は、ほどなくトポスないシデオロギーとして循環し始める¹³⁾。そのようなジャーナリスティックなメディアの循環の中に時代が加速的に動き始め、クライストはまさにそのさなかで定点をもたず浮遊していたと言えるだろう。ここで問題としたいのは、つまり、逆説的な言い方だが、クライストの独自性とは、他でもない流布する言説中であって、その意識的操作—引用と編集からこそ生まれたのではなかったか、という点である。

パリはクライストが最大の自負と意気込みを持って取り組んだ“Robert Guiscard”の構想を練った場所であり、3年後(1804年)それを破棄した場所でもある。この都市はクライストの創作活動が馴染まない場所の象徴のように

思われる。若い晩年、クライストは10年にも満たない創作活動に終止符を打つように（それはまた彼の人生の終止符のようにも見えるが）ドイツ初の夕刊新聞、『ベルリntax刊新聞』の編集・発行にかかる。1810年10月1日のベルリntax刊新聞第1号号外には次のようにある—「王立警察長官グルーナー氏は、公益のためのあらゆる企てを極めて懇切かつ快く支援下さっているが、氏のお陰をもって私どもは、ここに第一号をお届けする、かような号外において、市中およびその区域において、警察の観点からみて起こる珍しく興味あるものの全てについて、遅滞なく、詳細に、信頼に足る報告を行うことができることとなった。[...]」（II 423f.）速報性は無論のことであるが、警察の報告を記事にするというこれまでにない手法が評判を呼び、真似をする新聞も現れた（II 954 参照）。9月29日から連日火災事件をを報じているが、10月1日には「リヒテンベルクで現在（午前10時）農家が燃えている。」と現場中継が入り、翌日には、放火の疑いがあると続報が入る。連続放火と分かり、犯人逮捕で一件落着する（II 425ff.）。

『夕刊新聞』にあるのは、ベルリンやドイツに限らず、パリ、ロンドンなど外国通信も交えての、他ならぬ10年前彼がパリで見聞したような噂、逸話、珍聞、犯罪といった巷の言説の渦であった。「読者を楽しませ、日々の出来事について本物の情報を得たいという自然な願いを満足させるだけが目的ではない。同時に、きちんと根拠のある事実や事件について、非常に歪められた話が多いので、それを正すことも目的である」（II 426）とクライストは書いているものの、警察レポートの中でも町の噂に触れているように、他のところではなおのこと、真偽を問わない話が増えていく。やがて、プロイセン政府による検閲に加えて、クライストを煙たがっていた政府よりの既存紙が『夕刊新聞』に対して苦情を訴えた結果、演劇批評、政治情報、警察情報などを掲載できなくなった¹⁴⁾。最初の頃は人気は殺到して警察が整理に当たらねばならず、狭かった販売の場所を他に移したほどだった（II 452）『夕刊新聞』は、警察レポートがなくなると見る見る人気を失い、半年後には廃刊を迎えることになる。「ほとんど先走りつつ“瞬間を捉え”ようとすれば、つまりさらに速度を上げれば

どうなるのか？ そうなれば‘夕刊新聞’は、時代のために、時代のさなかに向けて書くのではなく、時代をして自分のために書かせる試みになりはしないか。」かくして『夕刊新聞』は、ほとんどが別の記事のコピーでできている冊子に墮していく。¹⁵⁾『夕刊新聞』は見聞の事実報道であるよりも、クライスト自身の手によって編集されたテキストの集合体として、次第に虚の空間を回り始めるのである。クライストにとってのパリは、出来事の空間であると同時に、より以上にテキストによって表象された空間であった。『夕刊新聞』によって彼は都市ベルリンにおいて、自らそのような虚の空間の生成に携わるのである。

この時代のとくに活字メディアの状況を、この関連において見ておく必要があるだろう。資本主義的生産・消費生活の浸透と拡大のなかで、読書を思索と社会参画の糧と考えてきた啓蒙主義的な読書形態は、次第になりを潜める。もっぱら娯楽としての読書が蔓延し、『ヴェルター』のような情緒面に傾斜したものが売れ、世紀転換期にはフィヒテが「麻醉薬」と呼んだという読書状況になっている。¹⁶⁾ C. Bürgerによれば、読者研究から見て、18世紀の最後の3分の1は、「伝統的な読書から近代的読書へ」あるいは「集中的な読書から拡散的な読書へ」の移行時代¹⁷⁾だという。文学市場が開け、活発化するにつれて、一方では読書は大衆化し娯楽化し、他方ではワイマール古典主義者による純粹芸術化、エリート化が進行する。いずれにせよ、読み、書く行為は次第に社会性を失い、「市民的—啓蒙的な文学の制度化から、市民的—自律的な文学の制度化への移行」が進む。いわば商品／消費記号としての作品／作家、ステイタスとしての読書が行われるようになるのである。

1800年あたりをピークに様々に形成されたサロンも、メディアのありかたに大きく関わっていた。¹⁸⁾ 公共の活字媒体（文学、新聞など）と私的領域の中間に位置するネットワークということができよう。ロマン派の芸術的サロンに見られるように、個の成立していく時代における、柔軟で開放的な社交形態ではあるが、逆に公共空間との乖離も進んでいかざるを得ない。個の自由の時代は、ルソーが孤独という概念を流通させ、自伝という個の表現形態を流行らせた時代でもある。クライストの孤独はサロンのなものからの自由でもあった

が、そのことが、彼が通俗ジャーナリズムという、より広いメディアに関わった理由の一つではないか。啓蒙的読書と学問を人生の目標にすえていたはずのクライストは、やがては、書物に対する否定的見解を吐露するようになる。それも書簡などに散見する言葉であり、ルソーの口吻と割り引く必要はあるが、クライストの立場表明は常にアンビヴァレントでもある。18世紀の後半には、物語を本当の話と思い込むようなドン・キホーテ型の「素朴な」読者から、芸術的文学作品の自律した価値を読み味わえる、目の肥えた読者への移行が進んだというが¹⁹⁾、一方では、そのような修練を望まない、ひたすら受動的なテキスト消費者も大量に誕生していたのである。いずれにせよ、啓蒙的な意味での文学の役割は崩壊しており、通俗ジャーナリズムが新しい市場を開拓しつつあることを、クライストは知っていた。『夕刊新聞』は「大衆のあらゆる層のための新聞」である。そこへの参入は、サロンのものとは別の、というよりより大規模で機能的な言説装置への投機的試みであったように見える。クライストに、反ナポレオン宣伝、国民を教化し、言論の場としての「祖国」の形成というような多分に現実政治的な意図があったとしても、大衆娯楽に並んでのことである。そもそもメディアそのものにこそ政治性の魅惑は潜んでおり、彼を捉えたのはそれではなかったか²⁰⁾

気球とテキストの表象空間

初めに見たように、「夕刊新聞」にとって気球の記事は恰好の材料であった。空の高みに浮かびつつ遠くを目指すという気球は、この時代の人間の知の欲望を象徴している。ルネサンスにおける透視遠近法の確立以降の、認識における視覚の優位はよく指摘される。それは、客観的・科学的知の拡張と同時に、かつて王権が「国見」によって領土の認知を行ったごとく、既知の空間の認知と未知の空間の所有という政治的欲望をも含意しているだろう。18世紀末に作られ19世紀前半一世を風靡した「パノラマ館」という視覚装置は、一方で仮想的錯覚装置としてホフマンらロマン派を捉えたが、科学的・客観的な視覚リ

アリズムと空間支配の遠近法(パースペクティヴ)が結びついたものであった²¹⁾ クライストがパリで頼った博物学者 W・フォン・フンボルトがパノラマを教育手段として讚えたのも偶然ではない。気球はこのパノラマの視点をさらに凌駕するものであった。かつてゴシックの塔が神を見上げるものであったとすれば、パノラマ、気球、そして後に近代技術の象徴として立ち上げられるエッフェル塔は、人間がそこから見下ろすためのものであった。

クライストの見たパリには、広告が満ちあふれ、ありとあらゆるイベントがあり、近代都市の冷やかな人間関係と同時に雑多な生業と情報の混沌があり、そして模倣された自然すらある。「これら花火と照明と見世物に飽きて、あるフランス人が、パリの住民に全く新種の楽しみを思いつきました、自然を楽しむことです。[...]時折人々はくすんだ、味気ない、悪臭のする町を後にして出かけて行きます—郊外へ、素朴で感動的な大いなる自然を楽しみに。」(B 268 f.)²²⁾ この「hameau de Chantilly シャンティーユ村」には、芝生があり、様々な遊具がある。樹林を散歩し、湖で船遊びを楽しみ、漁師の小屋や狩人の小屋で食事ができる。クライストがここでカッセルのヴィルヘルム丘に言及しているように、この模擬自然はイギリス庭園の類だが、有料の、輸入された商品としての風景庭園、まさに「体験テーマ・パーク」と言っている。

先述のクライストの科学批判は制度的なものにまで及んでいた。「フランス国民の全精神が力の一つにして向かったこの自然科学の研究すらが、どこへ向かっていくのでしょうか？ なぜ国は学識普及のこれらの施設に何百万もの金を費やすのでしょうか？ 真理が問題なのでしょうか？ 国に？ 国はパーセントで計算できる利益しか知りません。国は真理を応用したいのです—何に？ Künste 技術や産業にです。国は快適なものをさらに快適にし、感覚的なものをさらに感覚的にし、洗練された贅沢をさらに洗練したいのです。」(B 260, 強調はクライスト) 「パノラマの出現によって絵画も芸術の支配を脱しはじめる。パノラマの普及が頂点に達した時期は、パサーージュが出現した時期に一致する。」 W. ベンヤミンはこのように書き、「パサーージュと室内、博覧会場とパノラマは、この時代に生まれた。それらはひとつの夢の世界の残滓である。」と述べてい

る²³⁾見下ろされる場所、都市には目の娯楽が満ち溢れ始めている。視覚の特権化の中で、高く広く遠くを見る眼差しと収集・分類する博物学的知が、資本の帝国主義と結びつくとき、目の欲望は商品の宮殿を生んでいく。1798年にはパリで初めての産業博覧会が催されていた。やがて1851年、ロンドンで鉄とガラスの「水晶宮」の第1回万国博が開かれる。視覚の欲望と政治と商業経済をセットにした国家的イベントである。自然人の住むルソー的南国の理想郷も、そこでは見世物として好奇の眼差しに晒される²⁴⁾クライストの描いた（そして当時一般に描かれてもいた）パリは、後のパリ万博を経て消費の宮殿としての百貨店「ボン・マルシェ」に集大成される産業と資本の感覚世界、「奢侈と流行の首都」（ベンヤミン 340）を予兆的に提示している。後は鉄道と電気と高速輪転機を待つのみであった。

クライストはこの町を、ルソーの自然志向をいわば口実に、そそくさと後にして理想郷たるスイスに向かう。10年後クライストが、テキスト編集という装置を使って、最後の賭けのように試みたジャーナリズム活動は、パリで予感した近代商品社会とメディアの戯れの、自らの手による実践だった。彼にとって、そもそも書くことと書かれたものとはどういうものだったのだろうか。やはり『夕刊新聞』に掲載された「フリードリヒの海景色」という美術批評では、彼はアルニム／ブレンターノの元原稿を書き換えて自分の名で公表した（これについては、詳しくは別の所で考察した。注22参照。）。後で表した釈明文の悪びれなさは、彼にとってメディア・テキストが、匿名で編集可能なものである故だろう。もっとも、その釈明の中でなお、その文章の「精神」は自分のものとは言っている。ある書簡の中でも、伝えることの困難について、言葉によって表されたものは紙に書かれたコピーでしかないと言ういい方をしているが、そこでも伝えるべき「私の心」の存在には疑義は挟まれない²⁵⁾言葉が、彼の言うように「心」や「魂」そのものではなく「切れ切れの断片」しか与えない（II 626）というのは、今日的視点で見れば、むしろ当たり前な見解であろう。「心」、「魂」といった実体はなく、むしろテキスト（広い意味で〈情報〉と言ってもいい）によって編み上げられていると言った方がいい。石造りのアーチは

「全ての石が同時に落ちようとする」ために落ちないのだ、というクライストがこだわる比喩 (B 159) は、彼のテキストにこそあてはまるように思われる。実体がなく、実体を表すこともできない言葉を、一斉に虚へと崩落させようとすることによって、クライストは比類ないテキストのアーチを築き上げているように見える。「精神」や「魂/心」への相変わらずの依拠と、主体なきテキストという現象の予感の間にこそ、彼自身のアイデンティティーの危機はあったのであろう。

その危機感がアクチュアリティを失わないのは、それが 19 世紀以来漸増的に続いている我々のものでもあるからだ。ジャーナリストとしてのテキスト処理において、言葉のもつコード的機能に対する不快感を感じながらもアンビヴァレントな同意をしている点で、クライストは、ロラン・バルトの「著者の死」や「主体の消滅」を予感的に先取りしているように思われる²⁶⁾。バルトがテクスチャー（織物）としてのテキスト、「書かれたもの」を表に出すことで「書く主体」の虚妄を暴きつつ、しかしなおかつ書くことによるのみ彼自身であったように、クライストもまた、テキストの自動装置に身を投じることによってのみ虚の中の実を生きようとしたのかも知れない。バルトはやがてテキストの戯れを超えて生として「書くこと」を選択する²⁷⁾。確かに文学創造は、テキスト生産の手技としてクライストの生をなお支えたかに見える。それが叶わぬことはこの世が叶わぬことでもあった。そして彼はむしろコードの戯れに身を置くのである。その『夕刊新聞』の廃刊広告の 8 ヶ月後、クライストは欣然として自らの終焉を告げる。

Großstadt als Vorstellungsraum — Heinrich von Kleist in Paris

Zusammenfassung

In seinen Briefen aus Paris 1801 berichtet Kleist über die Schattenseiten der Großstadt und kritisiert die Zivilisation (eher im Format des Rousseau-Naturdiskurses, der die zweite Hälfte des 18. Jahrhunderts prägte). 1810 gründete Kleist

eine Boulevard-Zeitung, die “Berliner Abendblätter”. Mit der Schnelligkeit der Berichterstattung zielt er darauf, eine neu entwickelte Leserschicht in der Großstadt heranzuziehen. Nach kurzem anfänglichem Erfolg mit sensationellen Polizeiberichten arteten die “Blätter” zu schlaffen Wiederholungen von zitierten und verarbeiteten Texten aus. Kleists Zweifel an der Sprache als unzureichendes Mitteilungsmittel verbindet sich mit dem journalistischen Verfahren, Texte zur Unterhaltung in Anonymität kursieren zu lassen. Kleist hat von Paris und in Berlin, in seinen Briefen und in den “Abendblättern”, über zwei Luftballonflüge berichtet: ein Symbol für den Diskurs seiner Zeit an der Schwelle zur Technik-, Konsum- und Mediengesellschaft, und auch für seinen Umgang mit Mündigen-Texten bzw. Text-Medien.

注

- 1) Heinrich von Kleist. Sämtliche Werke und Briefe. 2 Bde, hrsg. von Helmut Sembdner, München, 1984, S. 327ff. 以下, 書簡を除くクライストからの引用は本文中に巻数とページ数をしるす。
- 2) John Hibberd, Hot Air over Berlin. Kleist; Balloon Flight and Politics, in: Colloquia Germanica, Bd 31, 1998/1, Tübingen and Basel, S. 46ff.
- 3) 「しかしこれまでに, 学問のお陰を被った発見で, 気球の発見ほど民衆を興奮させたものはない。」Gustav Freytag, Bilder aus der deutschen Vergangenheit. Bd. III. Absolutismus und Aufklärung, Gütersloh / München 1998, S. 304. ある気球興行の例 — 広場に小屋やテントが立ち, 飲食物が出され, 楽隊が演奏。広場に 5, 6 万人, 町の諸処で何千人もが固唾を呑んで見守り, 気球が上昇し始めると, 全員が蟻の群のように追って動き始めた, という。(S. 313ff.)クライストも 1788 年ベルリンにおける, ジャン＝ピエール・ブランシャールの気球飛行の話を知っていたようだ。Vgl. Horst Häfer, Kleists Berliner Aufenthalt. Ein biographischer Beitrag, Berlin 1989, S. 95ff.
- 4) クライストの書簡については, Briefe von und an Heinrich von Kleist 1793–1811, hrsg. v. Klaus Müller-Salget und Stefan Ormanns, Frankfurt am Main 1997. を参照した。同書からの引用は本文中に〔B〕と略記) ページ数をしるした。

- 5) Siegfried Jüttner; Großstadtmythen. Paris-Bilder des 18. Jahrhunderts. Eine Skizze. In: Deutsche Vierteljahrsschrift, 2/1981, S. 174.あるいはまた次のような指摘 — 「クライストは、18世紀全体を通して古典主義と宮廷的一貴族的世界の解体に伴った、フランスの頹廢という紋切り型を受け入れたのだ。」Gonthier-Louis Fink: Zwischen Frankfurt an der Oder und Paris. Variationen des Deutschland- und Frankreichbildes des jungen Kleist. In: Kleist-Jahrbuch 1997. S. 122.
- 6) 「パリを“バビロンの淫売”イメージで描写するルソー以来支配的な大都市批判の型に非常に合っている。」Michael Moering: Witz und Ironie in der Prosa Heinrich von Kleists, München 1972, S. 145. ただ、Jüttnerの言うように、この論議は一種の出来レース的なところがあり、バロックの「世界大劇場」をなぞるインテリの談論ゲームとして機能していたとも言える。「18世紀のサロン・エリートを担う層は、一種の懐疑の魅惑を感じつつ都市に向かい合うのである。」(Jüttner, 189) ルソーの言葉を語るものはいても、ルソーのように振る舞った者が多かったわけではあるまい。
- 7) Hermann F. Weiss, Funde und Studien zu Heinrich von Kleist, Tübingen 1984, S. 6.
- 8) Claud David, Kleist und Frankreich, in: Claud David; Wolfgang Wittkowski; Lawrence Ryan, Kleist und Frankreich, Berlin 1969, S. 10.
- 9) Vgl. Gisela Schlüter, Kleist und Montaigne, in: arcadia Bd. 22, Heft 3, Berlin 1987.
- 10) Vgl. Gisela Schlüter, Kleist und Marmontel. Nochmals zu Kleist und Frankreich, in: arcadia. Zeitschrift für vergleichende Literaturwissenschaft, Band 24, 1989, Heft 1.
- 11) W. Hülkによれば、これら夢想的個所は、「はっきりとルソー的な、彼の『孤独な散歩者の夢想』の第5の〈夢想〉を響かせる情景」であり、「徹頭徹尾ルソーの模倣」である。Walburga Hülk, Natur und Fremdheit bei Rousseau und Kleist, in: Kleist -Jahrbuch 2000, S. 37f.
- 12) Brownによれば、クライストは1790年代のイギリスにおけるピクチャレスク美学論議を知っており、書簡にもそれが投影されている。特に1800年8月21日の書簡に表れているが、ドレスデンやパリの時期もそうである、という。Vgl. Hilda M. Brown, Das Malerische und das Erhabene. Kleist und die englischen Empfindungen vor Landschaften, Kleist-Jahrbuch 1990, Berlin.
- 13) Wolfgang Raible, Literatur und Natur. Beobachtungen zur literarischen Landschaft, in: poetica 1-2/1979. 参照。例えば、「1773年には熱帯の島はヨーロッパとの比較でほとんど常に負けている。14年後は逆に純然たる理想郷になっている」(S. 118)という。「自然科学的関心と文学描写の接触の最初の兆しはすでに16世紀にあった。植物学と文学の間では、この接触はとりわけ18世紀末に起こった。風景描写の領域でのこの慣習の変化において、ルソーとサン・ピエールが重要な役割を演じている。」(S. 122)しかし、「ルソー

- は同時に、『Paul et Virginie』において風景が再び偽造される、というよりもむしろ、イデオロギー化される原因でもある。」(S. 118)
- 14) Vgl. Siegfried Schulz, Heinrich von Kleist als politischer Publizist, Frankfurt am Main, 1989 (bes. S. 94 ff.).
- 15) Bernhard J. Dotzler, “Federkrieg”. Kleist und die Autorschaft des Produzenten, in: Kleist-Jahrbuch 1998, S. 53, 57. 彼の言うように、この新聞の「失敗」よりも「成功」に説明が必要だろう。
- 16) Vgl. Onno Frels, Die Entstehung einer bürgerlichen Unterhaltungskultur und das Problem der Vermittlung von Literatur und Öffentlichkeit in Deutschland um 1800, in: Christa Bürger, Peter Bürger, Jochen Schulte-Sasse (hrsg.), Aufklärung und literarische Öffentlichkeit, Frankfurt am Main 1980.
- 17) Vgl. Christa Bürger, Literarischer Markt am Ausgang des 18 Jahrhunderts in Deutschland, ebd., S. 195 u. S. 201.
- 18) Vgl. Peter Seibert, Ästhetischer Geselligkeitsraum: Romantischer Salon, Literatencafé, Cyber-Kommunikation, in; Silvio Vietta und Dirk Kemper (hrsg.), Ästhetische Moderne in Europa: Grundzüge und Problemzusammenhänge seit der Romantik, München 1997. この論は、インターネットのチャット・パーティなどを、サロンのようなもの新たな現れという文脈で語ることの妥当性を検証したものである。「交際コミュニケーションの、“チャット”のこの脱一身体化は、コミュニケーションの包括的なテキスト化、すなわち、身体がただテキスト内容としてのみ登場しうるコミュニケーションによってのみ可能である。」(S. 379) この点では「チャット」はサロンのというよりも、テキストの匿名性の延長上にあるというべきだろう。
- 19) そのような歴史的な読書能力の獲得について — 「世紀末に広まった、人生は小説だという考え方は、単に虚構である現実への批判で始まり、現実に関連した虚構の理解へと続き、生活世界を空想の構想から解釈することに行き着いた、一つのプロセスの終着点であり転換点である。」Erich Kleinschmidt, Fiktion und Identifikation. Zur Ästhetik der Leserrolle im deutschen Roman zwischen 1750 und 1780, in: Deutsche Vierteljahrsschrift 1/1979, S. 64f.
- 20) 「この装置はしかし、〈情報〉と〈詩作〉を区別するのではなく、両方を同じレベルに置くものだ。」(Dotzler, a. a. O., S. 41) 『『夕刊新聞』全体によってクライストはフィードバック、別名サイバネティック・コントロールを狙う。』(S. 53)
- 21) クライストとパノラマの関連については、宇和川: 「〈験のない目〉—フリードリヒの海景とクライスト—」(『愛媛大学法文学部論集 人文科学編 第2号』, 1997年) 参照。
- 22) ルイーゼ・フォン・ツェンゲ宛のこの手紙は、ティークの『ウィリアム・ラヴェル』中

のラヴェルの手紙に類似点が多いことのほか、文体的にゲーテの『ヴェルター』を思わせる個所も指摘されている。Briefe, S. 765ff. 参照。

- 23) W. ベンヤミン, 「パリ—十九世紀の首都」, 浅井健次郎編訳, 『ベンヤミン・コレクション I』, 筑摩書房, 1995, 333, 336 ページ。
- 24) 吉見俊哉, 『博覧会の政治学—まなごしの近代』, 中央公論社, 1992, 参照。
- 25) 1800年8月20日付け書簡—「[...] 私の心をできるだけこの紙に描こうとするのだが, それはオリジナルに決して達することのない, 達し得ないコピーに過ぎないことを, 忘れないで欲しい。」(B 76)
- 26) ヌーボー・ロマン以降顕著になってきた, テキストとは何か, テキストを書くのは誰かという, いわゆる「テキスト・アイデンティティー」の問いかけは, 解決されたのでもなくなったのでもない。“Identity of the Literary Text”, ed. by Jo. Valdés and Owen Miller, Toronto, Buffalo, London (University of Toronto Press) 1985. についての書評で J. H. Petersen は, 著者の誰もがテキスト・アイデンティティーを前提にしてしまっていることに疑問を投げかけ, 次のように書いている。「テキストが読者の完全に自由なアレンジに任される材料としてのみ機能するという限りで, アイデンティティーを放棄している。どんな種類の理解も, どんな種類のテキスト生成も正しく, 真実で, 適切である。パラドクシカルに言えば, テキストのアイデンティティーは, アイデンティティーを持たないことにある。」「テキスト理論の言表は, テキストのアイデンティティーに触れない限り, 一般的妥当性を得られないだろう。」(Jürgen H. Petersen, Der Verlust textueller Identität in der Moderne, in: arcadia Bd 21, Heft 3, Berlin 1986, S. 293f.)
- 27) Vgl. Peter Bürger, Das Verschwinden des Subjekt. Eine Geschichte der Subjektivität von Montaigne bis Barthes, Frankfurt am Main, 1998. 文学はバルトにとって, 「もはや様々なコードの干渉の戯れではなく, [...] 宗教の死んだ後, 一人一人に関わる最後の問題(愛, 死, 痛み)が, 読者が直接に真理として経験できるように語られ得る, 媒介としてである。」(S. 210) 「60年代の構造主義を通り抜けた後, <作者の死>を宣言したモダニスト」は「古い, とくに別れを告げた市民的主体」に立ち返るのである (S. 211)。